

森と、杣と。

Mori to Soma to

2025.7

組合だより

vol.31

特集

高島林業「人」
— 森と生きる、人がいる。

高島市森林組合

高島林業“人”

森と生きる、人がいる。

森林は、誰かひとりの力で支えられているわけではありません。

森林の所有者、現場で施業を担う森林作業員、森林の未来を設計する森林施業プランナーや事務職員、森林を活用した林業を支援する行政職員——それぞれ異なる立場から森林に向き合う人たちがいます。

今回の特集では、さまざまな立場で森林や林業を支えている高島林業“人”に焦点を当ててご紹介。林業“人”の言葉から見えてくる高島市の森林や林業の現状と課題、そして未来へのヒントを探ります。



森林所有者・梅本健一さん

わたしにとって
山とは
大人になっても“あそび場”！
チェーンソーの練習などを楽しんでいます。

16歳の時に朽木平良に来て以来、60年以上高島市の林業に携わってきました。当時の山といえば広葉樹の山がいっぱい、架線を使ったパルプ材の搬出が盛んに行われていました。伐採後にはスギやヒノキを植え、下刈りや雪起こし、枝打ち、間伐と手間ひまをかけて山を育ててきました。しかし昔は明るかった山が今は真っ暗になってしまっています。間伐が必要な山がたくさんあるのに、作業をする人材の育成が遅れていると思います。次の世代に山を託すためにも、若い担い手の育成が大切ですね。

私は、先祖代々引き継がれてきた朽木の山林を所有しています。祖父は山の木を売って京都へ出て事業を興しました。木材が高く売れた時代ですね。そういう姿を知っているので、木の価値や山の重みは身に染みんでいます。今は手入れが行き届かず、放置されたままの山林も少なくない。自身で山に入り、できる限りの手入れを続けていますが、朽木針畑地域には相続されず誰にも管理されない暗いままの山も多くあります。

また今は行政も森林組合も大規模な林業を推奨されるケースが多いようですが、もっと小規模の事業や森林整備作業にも目を向けてもらいたいですね。

森林作業員・中越豊さん



わたしにとって
山とは
人生。人生の大半を山で過ごしてきた。
山に教わり、山に育てられた。だから、人生そのものです。

プランナーは日々所有者さんと相談しながら森林整備の計画を立てています。以前は山に関心のある所有者が多く、森林整備も進めやすかったのですが、今は自身の山の境界をご存知でない方も多く、まずは境界の確認からスタートすることもしばしば。境界が分かればもっとスムーズに整備が進むと思っています。(高柳)



森林施業プランナー・高柳美里さん/事務職員・饗庭郁恵さん

わたしにとって
山とは

そばにあるもの。
離れて見ても、中に入っても、
どっしりと構えた山に安心し
心を満たしてくれます。

静かに支えてくれるもの。
山は木や水、空気を育み、目立た
ずとも人の暮らしを支えてくれる存
在。総務の仕事への思いと重なる
部分があります。

私は事務職員として主に契約書の作成や補助金の申請手続き、木材の精算事務など、プランナーの仕事をサポートしています。山の仕事というと現場作業を思い浮かべますが、意外と事務作業も多いのです。補助金がないとままならない山の仕事を、後方から支援させていただいています。(饗庭)

行政職員・森本正明さん(高島市森林水産課長)

高島市は、令和7年4月に高島市森林整備計画を見直し、今後10年間の計画を樹立しました。全国的に主伐・再造林が推進されるなかで、市民のみなさんからは再造林した山を後世にきちんと引き継げるのかという不安や獣害に対する悩みの声が届いています。現場条件などによりますが、森林環境を保全していく観点からも間伐を重ねていく選択肢も重要かと考えています。

また大規模な集約化林業だけではなく、里山をまもる小さな林業活動にも注目していきます。地元の方が地元の山を手入れする仕事の地産地消だけではなく、市外から人材を呼び込み山ににぎわいを取り戻せるような、また山に関心を持っていただけるような施策を展開していきたいと考えています。



わたしにとって山とは

人の集う場(になって欲しい!)

山への関心を高め、身近で行きたくなる存在になるよう活動していきます。

5人の言葉から浮かびあがる 現状と課題

林業人へのインタビューを通して以下のような課題が見えてきました。

さらに間伐を進める必要がある

今回お話を伺った皆さんの言葉から見えてきたのは、市内にはまだ整備が進まず暗い山林が多く、さらに間伐を進める必要があるという共通の声でした。適切に間伐された山林では光が差し込み、樹木の生長が促され、生物の多様性も豊かになります。また、山林の環境を改善することは自然災害を防ぐことにもつながります。一方で高柳さんの言葉から山林の境界が不明瞭なため間伐などの森林整備が進まないという課題も見えてきました。こうした現状もふまえ、高島市では令和6年度よりリモートセンシングによる境界明確化事業(P7参照)をスタートさせています。今後の整備促進に期待が高まります。

主伐、再造林は慎重かつ適切な場所で

全国的に主伐・再造林が進められていますが、現場では、再造林への不安や課題の声も聞かれました。「伐った後に何を植えるのか」「将来どんな山を次の世代に引き継ぐのか」。再造林は、単に木を植える作業ではなく、「未来への森づくりのスタート地点」です。どんな樹種を選び、どんな管理をしていくか。その考え方の一例は、広報誌「森と、柚と。」Vol.29でも紹介しています。また、獣害への懸念の声も聞かれました。獣害対策の現状と課題については、本誌のP8・9で詳しく紹介していますので、ぜひあわせてご覧ください。



「森と、柚と。」vol.29

人材育成、後継者問題

中越さんの言葉にもあるとおり、後継者問題は深刻かつ急務です。梅本さんや森本さんもおっしゃっており、大規模な施業だけではなく、里山レベルでの小規模な林業活動にも大きな価値があることが見えてきました。地域と連携して人材の確保やその育成に取り組み、また積極的な情報発信やインターンの受け入れなど、特に若い方々を中心に林業だけでなく山や森林に興味を持ってもらえるような取り組みを継続していきます。

立場も環境も異なる5人に共通していたのは、「森を未来につなげたい」というまっすぐな想いでした。

そのためには、お互いの役割を理解し合い、つながることが不可欠です。

森の声を聞き、語り合うことで、高島の山はきっと、もっと豊かになることでしょう。

REPORT

森林公園くつきの森20周年「ユリノキまつり」に出展しました

森の恵みや保全の大切さを学ぶ場として宿泊や様々な体験ができる森林公園くつきの森が、開園20周年を記念して5月24日に「ユリノキまつり」を開催し、当組合もブースを出展しました。

当日は、あいにくの雨模様でしたが、飛騨五木グループが運営する響hibi-kiが開発したFOREST BALANCE GAMEとTAKASHIMAモルックを実施しました。FOREST BALANCE GAMEは対戦型の森づくりボードゲームで大人も子どももゲームを通して森づくりが学べます。当日体験いただいた参加者からは、森林を経済性と環境保全の両面から考えられて面白かったとの声がありました。またTAKASHIMAモルックは昨年開催した「Re-Woods 森とあそぶ一日」で開発したモルックと野球を融合したゲームで、大逆転で勝敗が決まるなど、大いに盛り上がっていました。



NEWS

ボルダリングボードを新旭養護学校の生徒が体験しました

昨年開催した「Re-Woods 森とあそぶ一日」。このイベントの中で制作した様々な樹種のホールドを用いたボルダリングボードを新旭養護学校の生徒に体験していただきました。今回体験いただいたのは、小学2年生の4人。このボードは立てかけ方により傾斜を自由に変えられるので、最初は床にフラットに置いて飛び石のようにして遊び、その後徐々に角度を付けていくなど、子どもたちのレベルに合わせて設置し、遊びを通して全身を動かす楽しさと同時にそこに木の触感や香りがあることの喜びを感じていただきました。体験した子どもたちの中には言葉を発するのが難しい子もいましたが、他の子が遊んでいるのを見て積極的にトライし、達成感や自信を得て次々にチャレンジしていました。



REPORT

森林プランナー育成対策 法務&税務研修に参加しました

国内の森林面積の約6割が私有林で、その約4分の1を不在村者※が保有すると言われていています。山林所有者の高齢化を背景に不在村者の割合は増加の一途を辿っています。こうした状況を踏まえて、令和5年4月から段階的に開始されている所有者不明土地関連制度や令和6年4月から義務化された相続登記の申請などに関する法務研修と、山林に関する税務研修に勝野主事と北岡主任が参加しました。

法務研修は主に山林所有者と森林組合間での契約や、相続登記についての知識が体系的に学べる内容でした。税務研修では租税の一般的な知識や林業における支援措置としての租税特例が紹介され、山林所得における税金の基本を学ぶ機会となりました。

高島市内の森林においても市外の方の所有林や、所有者不明の山林が増えつつあり、今回のような法務、税務の知識を深めていく必要性をあらためて感じています。もし山林の管理などについてお困りのことがございましたら、当組合までご連絡ください。

※不在村者・・・所有している森林とは別の市町村に居住されている方



REPORT

マキノ東小学校の生徒に林業体験授業を行いました

5月26日にマキノ東小学校の3年生10名を迎えて林業体験授業を行いました。まずは重機グラブプを使って丸太をつかむ体験。目の前で動く大きな重機の迫力に、子どもたちは「すごい!」と大興奮。続いてチェーンソー体験では、スタッフの補助のもと、丸太を輪切りに。大きな音に驚きながらも、楽しそうに取り組む姿が印象的でした。体験を通して、森の仕事の面白さや木の魅力を感じてもらえたようです。最後には、あらかじめ用意していたヒノキのコスターをお土産にプレゼント。「いい香り!」と嬉しそうに持ち帰ってもらいました。終始にぎやかで笑顔のあふれる、楽しい一日となりました。



REPORT

株式会社 ITOGEN の製材工場を組合役員が見学しました

令和5年11月より、組合の子会社として木材の製材・販売事業を行っている株式会社 ITOGEN へ組合役員の皆さんが見学に訪れました。

当日は ITOGEN 取締役の宮村さんより、場内をガイドいただき製材加工の流れを体験することができました。組合からも出荷している原木丸太が製材機で板へ加工される瞬間を間近に見ることができるなど、大変貴重な機会となりました。宮村さんから木材業界全般のトレンドや滋賀県内の動向、組合との協働による今後の展望といった話題に対して、役員の皆さんからは質問が飛び交い、参加者一同の木に対する熱い思いを感じる場となりました。

ITOGENでは、高島市の木材を含むびわ湖産材の魅力をもっとPRするため、積極的に今回のような見学ツアーに取り組んでいます。



NEWS

LAGO 大津の屋外園路に展示するコナラの丸太を納品しました

和菓子の販売で知られるたねやの新店舗 LAGO 大津の開店にあたり、里山の環境を再現した「琵琶湖の森」にコナラの丸太を展示したい…と、相談を受けたのが一昨年の11月頃。すぐに希望に沿う丸太を探し始めましたが、良い条件で伐採、搬出ができる木がなく悩んでいたところ、施業中の作業道沿いに条件に合うコナラがあるとの情報があり、現地で確認すると直径40cm~50cm前後の真っすぐなコナラが並んでいました。搬出も容易にできることから、利用することとしました。

担当の方に「この真っすぐなコナラです」と自信満々に言うと、「こちらの曲がった方をお願いします」と返答。良い丸太=真っすぐな丸太と思われがちですが今回はそのイメージとは異なる希望で、まさに目からうろこでした。

後日、LAGO 大津に納品し設置の様子を見学しましたが、コナラが描く曲線が現地の雰囲気にもマッチしており、自らの価値観を改めるとともに、広い視野で森林を観察していくことの必要性を感じました。



第58回林業関係広報コンクールで最優秀賞を受賞しました!

高島市森林組合だより「森と、木と。」が第58回林業関係広報コンクールの広報誌部門にて、最優秀賞である林野庁長官賞を受賞し、デザインを担当した高柳技師が青山林野庁長官から直接表彰を受けました。



NEWS

ヒートン・ダグラス技師が日刊木材新聞で紹介されました

一人前の木こりの道、歩み始める

花粉症に負けず「仕事続けていきたい」

ヒートン・ダグラス・リチャードさん



「自信は必要だが過信は駄目」
と話すリチャードさん

高島市森林組合
ヒートン・ダグラス・リチャードさんは高島市森林組合（滋賀県高島市、清水安治代表理事組合長）の職員として、丸太の伐採・出材や作業道の整備などを担っている。2021年9月に入職以降、業務の傍ら林野庁の「緑の雇用」事業の研修生として林業に必要な基本的技術・知識を習得し、必要な免許も取得。24年8月に同事業の適用期間が満了し、一人前の木こりとしての道を歩み始めた。
リチャードさんは英国・ピートーバラ出身の34歳（1月1日現在）。16年に友人に誘われて来日し、横浜市で英会話教室の講師を始めた。その後、京都府長岡京市へ転居し英会話講師を続けたが、コロナ禍でオンライン授業が中心となり自宅で仕事をする日々が続いた。在宅ワ

ークに物足りなさを感じていたなか、リチャードさんは駅で林業従事者募集のポスターを目にした。これがきっかけで「一度挑戦してみたい」と思い立ち、すぐに応募し採用となった。
リチャードさんは自然が好きで、仕事内容に満足している。最初は対応できない作業が多かったが、緑の雇用の研修や先輩の背中を見て学ぶOJTなどを通じてできることが徐々に増え、自信を持てるようになってきた。ただ、林業は危険を伴う作業が多く、自分だけでなく他人にけがをさせてしまうことも知った。そのため「自信は必要だが過信は駄目だ」と自分に言い聞かせながら、先輩に追い付けるよう日々技術の鍛錬に努めている。
同組合の高木渉代表理事専務は「彼が仕事と真剣に向き合う姿勢には信頼を寄せている。国籍は関係ない。もう貴重な戦力だから辞められたら困る」と話す。一方、リチャードさんも辞める気持ちは全くない。林業はもとより、同僚との付き合いやお気に入りのバイク（ハスクバーナ・37500）で巡るツーリングなど、高島市での生活を満喫している。たった一つの悩みは「花粉症」だが、薬を飲みながらでもこの仕事を続けていきたいという。

日刊木材新聞2025年1月1日付

台風、強風対策大丈夫ですか？

台風や強風により倒れるおそれのある住宅敷地内などの立木を専門の技術者を派遣して安全に伐木します。組合にお気軽にご相談ください。

組合員の名義変更はお済みですか？

組合員の名義人となっておられる方が、相続や世代交代により名義を変更される場合や、住所の変更がございましたら、変更の手続きをお願いいたします。必要書類を送付いたしますので、電話もしくはメールにてご連絡ください。

組合職員の意外な一面を紹介します

Vol.8 職員の横顔



普段、朝型の生活をしており、平日の夜は子供と一緒に午後9時半頃には寝てしまうため、ほとんどテレビを見ない私ですが、ひとつだけ毎週楽しみにしている番組があります。NHK総合で金曜日午後10時から放送されている「ドキュメント72時間」という番組をご存知でしょうか。毎回あるひとつの場所で72時間（3日間）に渡って取材を行い、そこで見られるさまざまな人間模様を定点観測するという趣向のドキュメンタリーです。

ふらっと立ち寄られる方々へのインタビューからは、これまで過ごされてきた人生や頑張ってきた仕事、ご家族について、ご自分の中で大事にしてこられたことなど、本当に多様な内容ですが、皆さんの人生経験や目標が、参考や励みになることがとても多く、まだまだ頑張らなくてはという思いになります。また、いろいろな方の人生を通して、見たことのない世界のことも知れ非常に勉強になります。お時間があるときに、是非一度ご覧になってはいかがでしょうか。ちなみに年末には視聴者投票ベスト10特集があり、それもまたおススメです。



課長 森林整備課
清原 猛史
きよはら たけし

架線搬出 導入へ向けた“現在地”

これまでの先進地視察において、架線による森林整備の有効性を確認出来たと共に、タワーヤードが安全性、操作性に優れた機械であり、丁寧に使用することで、従来の施業よりも環境への負荷が少ない施業を可能にすることを確認しました。

今後、当組合内でも導入に向けての協議を進めていくところですが、これまで確認してきた施業に関する内容の整理と併せて、実際に架線での搬出に適した現場がどの程度あるのか、オペレーターをどのように育成するのか、他の架線搬出機械の研究等、具体的な話し合いを重ねています。

まず、他の架線搬出機械研究の一環として、今津町深清水地先で実施している主伐現場においてスイングヤードを使用しています。これは、通常のバックホーにワイヤードラムが2軸積載されており、このワイヤーを山の先柱に回し、張り上げることで架線による集材を可能とします。パワーが低いため、大径木の全幹集材は難しく、集材距離が100m程度と短くなるのが難点ですが、移動が容易であり、小まめな張り替えが可能で、タワーヤードと比較して導入推定コストは3分の1程度と、架線搬出施業に取り組む第一歩として容易な点がメリットとして挙げられます。

次に、タワーヤードの使用を想定している遠隔地現場での採算性については、車両系搬出機械と比較した際、採算性は向上することが確認出来ました。森林作業道の開設が難しく、施業が出来なかった急傾斜地や深い谷の対岸等、広範囲を施業可能な経済林に出来る可能性があることが確認できました。

今後は、まずは架線による搬出が適する現場のリスト化を進め、導入に向けた準備を進めていきたいと考えています。そして、これらの検討を慎重に進めた上で、実際に使用するオペレーターの育成を図っていきます。



スイングヤードを使った主伐現場

リモートセンシングでひらく、新たな森林管理 境界明確化の新しいかたち

「うちの山、どこまでが自分の土地か分からないんです」
こんな声を、私たちはこれまで何度も耳にしてきました。かつて山の境界は、人々の記憶や信頼により守られていましたが、現在では所有者が不明確な山が増え、それにより手入れができずいつの間にか放置されている例も多く見られます。

当組合でも、これまで現地立会による境界明確化を進めてきましたが、所有者に山へ足を運んでもらい、記憶を頼りに境界を確認する作業は時間と労力を要し、大きな課題となっていました。そういった問題を解決すべく、今年度より始まったのがリモートセンシング技術を活用した境界明確化です。

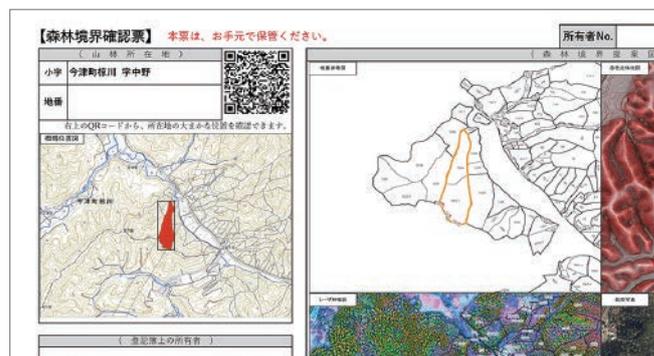
この技術では航空機からのレーザー照射により、尾根や谷などの地形や、植生の種類を反映した高精度な図面

の作成が可能となりました。これに過去の施業履歴や地元の方への聞き取りなどを踏まえて、より精度の高い境界案を作成し、所有者の皆さまには会議室などでご確認いただいています。「ああ、この谷はよく覚えているぞ」「若い頃、親父とここまで木を伐りに行ったな」そんな記憶を思い起こしながら、昔の図面やメモを広げて境界について考える時間は、自分の山を改めて知り、大切に思うきっかけにもなっています。

当事業を行った今津町椋川地区では、連絡が取れたすべての所有者から合意を得ることができ、約170haの森林の境界を明確にすることができました。境界が明確になれば、山の整備も進めやすくなり、次の世代への継承も安心して行えるようになります。そして何より、自分の山に向き合い、その価値を再発見する一歩にもなるのです。



山林所有者からの聞き取りの様子



所有山林を記した森林境界確認票

獣害

じゅうがい

次世代へ
森林を残す
ため
に、
今やるべきこと

Part.1



これらの写真は高島市内の山林で起こっている野生動物たちによる樹木等への被害、いわゆる「獣害」の一例です。動物たちの生活場所である山林をフィールドとする林業にとって獣害は深刻な問題となっています。

民家近くでもニホンジカやイノシシ、はたまたツキノワグマが目撃されることも増え、驚きを感じることも少なくなっています。では山林ではいったい何が起こっているのでしょうか。そしてこれから私たちはどのようにしてこの山を守り次の世代へつないでいけばよいのでしょうか。そのヒントを探ります。

山林における獣害とは

獣害の代表例として知られるニホンジカ（以下、シカ）について、滋賀県ニホンジカ第二種特定鳥獣管理計画(第4次)によると、全県的に推定個体数は減少傾向にあると報告されています。しかし、高島市内においては生息密度の推定指標となる糞塊密度の上昇傾向が確認されており、シカの存在が地域の山林に与える影響の大きさが改めて浮き彫りになっています。シカが山林で主な食料としているのは森林内の下草や、中低木類の新芽や葉、樹皮など、さらには新たに植えられた再造林地の苗木は被害を受けやすく、地域の山林の再生を困難なものにしています。

またツキノワグマによるスギやヒノキの“クマ剥ぎ”も見過ごすことはできません。

一日に5kgもの食事をとると言われるシカ。高密度で生息している高島市内の山林では、下層植生状況が乏しくなり、生物多様性の低下を招き、さらには土壌流出も生じさせるなど森林生態系への悪影響も顕在化しています。これらの影響は森林の健全な育成や再生を妨げ、林業経営や暮らしにも影響を与えています。ここで長年にわたり、山を歩きその変化を見てこられた安曇川町の猟師・入江伸司さんに話を聞きました。

私は、約40年前から猟師である父親に連れられて山に入っています。今でこそシカの被害が話題になりますが、当時は山でシカに出会うことなんて、ほとんどありませんでした。自身が猟師になったのは17年前。その頃にはすでにこのあたりの里山にもたくさんのシカがいて、年間100頭以上を捕獲していました。しかし近年、少し様子が変わってきました。これまでほぼ見かけなかったシカの大好物とされる笹が生い茂っている山が増えてきており、里山周辺で以前よりシカを見かける機会が減ってきていると感じています。その理由としては、安曇川町では猟師の活動が圧力(プレッシャー)になって、大半の個体が谷の奥深くへと逃げ込んでいるのではないのでしょうか。実際、奥山に入ると群れに出くわすことも少なくありません。

Interview 猟師 入江伸司さん



1. 単木ネット 朽木能家

高島市が実施する災害に強い森林作り事業（予防伐採）による県道沿いの伐採箇所では、植栽木に単木防護ネットを被せています。雪の影響による倒伏はあるものの、ネットが機能しているものは獣害被害はあまり見受けられず、140cmのネットを超える植栽木も出てきています。ネットの効果に加え当該現場は県道沿いのため、日常的に車の通行があることからシカにわずかでも圧力がかかっている可能性があります。



獣害対策について

2. 防護ネット 安曇川町下古賀

安曇川町下古賀では、平成30年度の大型台風により発生した風倒木処理後の植栽エリアの周囲を防護ネットで囲いました。植林から約6年経った今では背丈を超えるスギが育ち、獣害の跡は見られません。入江さんのインタビューにもあるように、当該現場は猟師さんの活動場所であり、シカに圧力がかかっている可能性が高いと考えられます。



3. 防護試験 朽木麻生

令和5年度に皆伐・少花粉スギの再生林を行った植栽地では、複数の獣害対策の試験を実施しています。生長点を防護ネットで覆う方法や竹の支柱を用いて防除する試験などです。

しかし現状は、シカの食害を防ぐことはできず、ほぼ全ての植栽木で先端が食べられる被害が確認されています。この植栽地は県道沿いに位置しているものの、現場の奥の方では道路から距離が離れるため、動物たちの警戒心は薄れやすい環境にあると考えられます。



春先～初夏に発生するクマ剥ぎ 朽木麻生

4月～6月にかけて多発するクマ剥ぎ。その目的については諸説ありますが、樹皮下の形成層の繊維を食べる（舐める）ためにはいでいる説が有力です。樹皮をはがれたスギやヒノキは、自己防衛のため樹皮を巻き込み、変形してしまうことで木材としての価値が下がり、また樹皮を一周はがれた木は、根から水を吸い上げることができなくなり、最悪の場合枯れてしまうこともあります。



今後の展望と方針

まず、今回紹介した現場は、いずれも人間の生活圏に近い里山です。こういう場所でも獣害対策をしないとイケない現状。これは人間と動物の生活圏が近づきすぎ、さらには重なってしまっている状況を示しています。まずは人間と動物の生息域を分離すること。そのためには奥山と呼ばれる山奥の山林の整備を進め動物の住処を確保し、併せて人間と動物の生活圏の間に位置する里山も適切に管理することで動物が人間の生活圏に出にくい環境を作ることが必要です。

これまで実施した植栽時の防護ネットや単木ネットによる物理的防護は一定の効果を発揮していると考えますが、これらの防護法は、施工時の手間や設置費用、施工後の見回り、修繕など、成林するまでの管理に手間や費用がかかることも事実です。

加えて、猟師さんの存在も無視できません。先の安曇川町下古賀の事例のように猟師さんが日々見回りをして

いる山林ではその警戒心からか、シカの食害が無く成林へと向かっています。令和7年度より、滋賀県においても滋賀県次世代森林育成対策事業として森林整備を進める上で狩猟関係者と協働することに関して一部補助金も新設されました。再生林を進める上で、狩猟関係者との連携およびシカの頭数管理は避けられない時代に入っています。

高島市での再生林地における獣害対策試験は途に就いたばかりです。広い視点での仮説のもと防護方法や造林方法の研究を続け、森づくりにかける所有者の考えや予算など現場ごとの事情がある中、地域に根差す森林組合として、健全な山林を次世代へつないでいく方法を模索、提案し続けます。



次号では森林における獣害Part.2をテーマに森づくりの実際を紹介します。（予定）

高島市森林組合 中長期計画

パーパス

信頼される新しい林業を創る

方針

- ①「森林資源価値の最大化」【経済性】
- ②「組合員の高齢化、無関心化、不在化への対応」【社会性】
- ③「琵琶湖水源としての森林環境機能の改善」【環境性】
- ④「理念(パーパス)を実現する組織体制の確立」



目標

中期目標(5年後)

① 素材生産量の15,000㎡ (A～C材)に対応できる 事業運営体制を確立する	② リモートセンシングによる 境界明確化を実施し 森林整備の事前準備を進める	③ 経済林と環境林をゾーニングし それぞれに適切かつ有効な 森林整備手法を検討する	④ 地域林業の将来を担う 人材の計画的採用と 育成・定着を図る
---	---	--	--

長期目標(10年後)

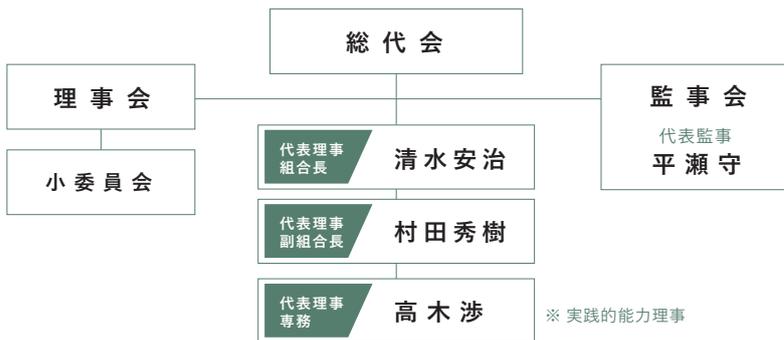
① 多様な木材ニーズに対応し 20,000㎡の素材生産により 森林資源価値を最大化する	② 明確化された森林境界に基づき 長期にわたる経営管理団地の 規模の拡大化を実現する	③ 琵琶湖水源の森林において ゾーニングに基づいた 効果的な森林整備手法を実践する	④ 安心して働きやすい職場で 意欲と能力のある人材が 地域林業をリードする
--	---	--	--

方策

① 森林資源価値の最大化【経済性】 <ul style="list-style-type: none">○森林や木材の価値を高めて多様な利用を創出する○製材品のニーズに対応した造材や加工による流通を図る○木材の有効活用による利用歩留りの最大化を図る	② 組合員の高齢化、無関心化、不在化への対応【社会性】 <ul style="list-style-type: none">○組合員に対するアプローチを強化する○山林を管理する新しい技術や多様な手法を導入する○組合員や山林所有者からの信頼性を向上させる
③ 琵琶湖水源としての森林環境機能の改善【環境性】 <ul style="list-style-type: none">○水源涵養をはじめとした森林の多面的な機能を高める○流域の河川環境を保全し水質への負荷を軽減する○森林のゾーニングにより効果的な森林管理を実施する	④ 理念(パーパス)を実現する組織体制の確立 <ul style="list-style-type: none">○将来を担う人材を確保し、育成する(ヒト)○安全性や効率性を高める機能を導入する(モノ)○働きやすい職場環境や働き方を構築する(コト)

高島市森林組合組織図

令和7年6月1日



常勤理事	2名
非常勤理事	13名
非常勤監事	3名
合計	18名

職員	男	15名
(パート含む)	女	6名
合計		21名

森林整備課

課長 清原猛史

森林計画係	森林施業係		
係長(兼務) 清原猛史	係長 島本達	主任 俣野長之	主任 来見嘉卓
主任 北岡孝太	技師 ヒートン・ダグラス・リチャード	技師 高岸隆己	技師 野崎将司
技師 高柳美里	技師 櫻井祐斗	技師 宮田泰成	継続雇用 甲斐文男
技師 向井優佳	嘱託職員 伊藤和幸		
技師 澤田圭吾			

業務内容

受託造林、施業集約化、森林経営計画、加工品販売、病害虫防除、素材販売、運搬、県営林・市有営林・造林公社事業、諸請負事業、安全管理指導など

総務課

課長 志村恵子

総務経理係	企画管理係
主任 饗庭郁恵	主任 桂田孝太
主任 勝野真士	主事 清水由美子

業務内容

役職員の福利厚生・労務管理、会計、庶務、組合員管理、財産管理、受託造林精算事務、森林保険事業、購買事業、一人親方事務など、椎茸菌床生産の指導管理



New Face! 新入職員紹介

2025年4月から組合職員として仲間入りした2人を紹介します!

みやた たいせい
宮田泰成 (24)
森林整備課森林施業係

登山好きの父親の影響を受けて山林に興味を持ち、森林施業の仕事に就くことに決めました。既に様々な現場でお仕事をさせていただき、普段人が立ち入らないような山あいで草花や木々に囲まれ日々癒されています。今後、山林への知識を深め専門的な技術も高めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

さくらい ゆうと
櫻井祐斗 (27)
森林整備課森林施業係



前職ではプロキックボクサーをしていました。万が一熊が出て、たぶん3ラウンドまでは戦えます。リングでは「1ラウンドで倒す」が信条でしたが、これからは「100年掛けて育てる!」に心を入れ替えて参りたいと思います。まだまだひよっこですが、どうぞツッコミとご指導よろしくお願いいたします!

2024年12月～2025年5月の木材出荷量は約7,100㎥でした。うち、建築用材等として取り扱われるA材は約2,300㎥、合板用材等として取り扱われるB材は約2,100㎥、製紙用・バイオマス発電等として取り扱われるC材は約2,700㎥でした。

また令和6年度(令和6年6月～令和7年5月)のA材取扱量は3,471㎥で平均単価は約15,000円/㎥、B材は3,769㎥で約13,000円/㎥、C材は4,668㎥で約7,000円/㎥となり、総材積で11,908㎥で、ABC材平均単価は11,229円/㎥でした。昨年度と比較し、材積は約11%の増、平均単価は12%の増でした。要因としては、C材の需要の高まりと、今年度前半から引き続きグループ会社のITOGENに直接販売することにより、販売単価の上昇につながっています。加えて5m～9mといった長尺材の注文材に個別対応できたことも単価上昇の要因です。

このほど県立近江富士花緑公園内にオープンする、木育施設「しがモック」に展示する県産広葉樹材7種類を当組合で納品しました。子どもたちが滋賀県の多様な木に触れ、楽しく学べる機会となることでしょう。今後もこういった多様なニーズに迅速に対応することで、組合員の皆さまの山の価値を高められるよう、積極的に取り組んでいきます。



「しがモック」に納品した県産広葉樹材7種類



SHIGA TAKASHIMA

Re-Woods

森とくらす一日

チェンソー体験、林業機械実演、木育木エフ-ショップ
復活!木の市場、高島市のおいしいもんマルシェ

2025
10.18 (sat)
10:00 - 16:00

📍 高島市森林組合 (予定)



高島市森林組合

HP <https://takashima-forest.jp/>

〒520-1412 滋賀県高島市朽木野尻 364-2

電話 0740-38-2214

FAX 0740-38-3277

メール info@takashima-forest.jp



高島市森林組合
HP



Instagram
[@takashimashi_forest](https://www.instagram.com/takashimashi_forest)